

令和4年3月30日(水)

(朝日新聞)今年度最後の定例会見ということで、まず市長から、よろしくお願いします。

(上定市長)よろしくお願いします。今日は、6項目についてお話をします。

まず1項目、松江市総合計画が完成しました。この総合計画は、これまで審議会、市民の皆さまに話をお聞きする機会を設け、アンケートも含めて2,000人強の方からご意見をいただきました。そして今回、冊子の形が完成しました。皆さまの手に取っていただきやすいサイズとし、内容もイラストをふんだんに入れカラフルなものになっており、分かりやすく皆さんと共有しやすいものと自負しているところでございます。様々な機会において、この松江市総合計画を共有することで、一緒に歩みを進めてまいりたいと考えています。また、松江市のホームページからもダウンロードすることができます。さらに、市役所本庁の政策企画課、支所、公民館、イオン松江の市民サービスコーナー、島根町、東出雲町にある松江市立図書館、県立図書館でも閲覧することができます。今後、市民の皆さまに知っていただく機会として、市報松江の5月号、市公式ユーチューブの動画、出前講座、これは学校や地域で開催する予定です。また、これまでもミライソウゾウ会議という、高校生から40代の方を対象にした交流の機会を設けておりましたが、これを7月以降に再開し、そういった場で、この総合計画の内容について皆さんと共有することで、「夢を実現できるまち 誇れるまち 松江」という、この総合計画で目指す松江の将来像の実現につなげていきたいと考えております。記者の皆さまにも、ぜひ積極的にご活用いただき、ご周知いただければと思っております。この冊子には、私の挨拶などは載せておりませんが、私がこの中に7人登場しますので、上定を捜せということでお捜しいただければと思います。

次に、中心市街地エリアビジョンの策定についてです。先ほどの総合計画における将来像の中で、中心市街地、まちづくりをいかにしていくかは非常に大きな課題です。その課題の克服、あるいは新たなまちづくりのための第一歩を踏み出す道しるべとして、今回、中心市街地エリアビジョンを策定しました。中心市街地を再生する、歴史・文化・水辺を活かしたまちなか、人々が集い歩きたくなるまちなか、若い世代が活躍するまちなかを狙いに目標に掲げております。こういったことを行政だけで進めていくことは当然できません。総合計画と同様に、市民の皆さまと共有し、進めていきたいと考えております。今回、スローガンとして大きく掲げておりますのは、「車中心から人中心のまちなかへ」です。中心市街地というときに、松江城、殿町からL字に曲がって松江駅のエリアについて、6つのゾーンに区分けしています。1つ目が、源助公園と伊勢宮港湾緑地などの大橋川のエリア、日常の営みが水面に映える「かわ・まち回遊ゾーン」です。日常的な水辺空間の利活用の推進、水面を活用したアクティビティーと水上交通の創出を考えています。2つ目が、松江城・松江歴史館の周辺地域、江戸期の歴史・文化を今に伝える「松江城周辺ゾーン」とし、統一感のある歴史的街並みの保存と形成、大手前駐車場の今後の在り方、交流広場化等について検討してまいります。3つ目が、歴史・文化を活かした、新たな挑戦が生まれる「白潟周辺ゾーン」、遊休不動産を活用した多様なコンテンツの集積と世代間の交流の促進、また、お茶や和菓子、蔵やお寺に親しむ機会をつくり、さらに安心して歩ける歩行空間の整備を考えています。昨年の10月から11月にかけて行った社会実験の結果も踏まえて、活用の方法を検討していきます。4つ目が、近代建築群を活かした、新たな挑戦が生まれる「殿町周辺ゾーン」、近代建築物を巡るまち歩きエリアと位置づけ、魅力的な体験ができる目的地を創出してまいります。5つ目が、市役所、松江しんじ湖温泉街

のエリア、人が集い、湖畔を楽しむ「湖畔ゾーン」、新庁舎と一体となった湖畔の整備、健康づくりの活動拠点として、松江しんじ湖温泉駅から殿町に向かった歩道の整備、日常的に水辺空間を利活用していくことも考えてまいります。最後6つ目が、多くの来訪者が憩い集う松江の玄関「松江駅周辺ゾーン」です。南北駅前広場の機能の再配置、駅前から歩きたくなる空間・店舗のつながりを創出してまいります。そのほかにも、繁華街であります伊勢宮において、夜間の歩行者専用道路、市民が集えるような松江の食、台所ですね、ということも今後検討してまいります。この中心市街地エリアビジョンを一つの基点にし、まちづくりについて考えてまいります。市民の皆さまと共有するために、各ゾーンの住民の皆さま、商店主の皆さまとの意見交換会を実施します。そして、この中心市街地、商店街のシャッター街化、駐車場化の状況をどうにか再生、再興するべく、官民で連携しながら具体的な取り組みを進めたいと考えております。

3つ目は、カラコロ工房の新活用基本構想についてです。カラコロ工房は、今回、新たな活用方策についての基本構想をまとめました。昨年の10月にサウンディング調査を行い、民間の皆さまからカラコロ工房をどういった形で利用できるかというご提案をいただきました。それを受けて、外部の有識者からなる検討委員会で議論を重ね、この基本構想を策定しました。カラコロ工房を新しく活用する際のコンセプトは、「水の都・松江の「豊かな日常」を体感する場所へ」、カラコロ工房をグレードアップしてまいります。松江に通常当たり前にある、例えばお茶や和菓子、伝統工芸、そういった文化を松江市民のものとして、そしてそれをまた旅行者、観光客の方にも楽しんでいただく、そういった拠点を目指します。テナントエリア、テラスとも呼んでおりますが、屋根が開閉式で、天気の良い日には、その青空の下でのランチタイムや、夜も楽しめる場所に生まれ変わるよう、取り組みを進め、また、起業や創業のチャレンジができる店舗も設けていきたいと考えております。本館1階は、松江の名産品、工芸品などを取り扱う店舗による、マルシェ的なにぎわいの創出を考えています。本館2階、3階では、お茶や和菓子を楽しむ、あるいは陶芸といった、職人の方が実際に講師となってものづくりの体験ができる場所を設けていきたいと考えております。カラコロ工房はもともと日本銀行の松江支店でしたので、地下には当時の金庫室がそのまま残っております。ここを文化や歴史を楽しむような美術館的な役割も含めて、多目的に使えるスペースとなることを想定しています。今後の整備のスケジュールは、令和4年7月頃に民間運営事業者を公募し、12月頃に事業者を決定し、改修工事に入っております。そのため、令和5年4月から令和6年の下期のところまで休館とし、令和6年度中にリニューアルオープンする予定です。休館中には、市民の皆さまにはご迷惑をおかけしますが、ご理解いただければと考えております。

4つ目、病児保育のオンライン予約サービスを開始いたします。病児保育とは、病気や病気の回復期のお子さんで、保育所にも行けず、家庭での育児もできない場合に一時的に預かる保育サービスで、市内の5施設で実施しています。この病児保育を利用するには、色々な面倒くさい手続きがございます。例えば、市役所の窓口で利用登録が必要ですし、預ける時には、その日の朝に空いている施設を電話で確認する必要があります。朝は電話も混み合いつながらないこともありますし、例えば前日に予約して、次の日の朝、熱も引きキャンセルする場合もまた電話がつかない。施設側も電話での対応が大変という状況でした。これをスマートフォンでのオンライン化、この「あずかるこちゃん」という病児保育の支援システムによって利便性を高めていきたいと考えています。まず、登録手続をオンライン化し、マップ検索で空き状況を見えるか化します。またLINEを使って、いつでも予約やキャンセルができるようになります。利用登録を4月15日から開始し、実際に施設の予

約は5月2日から開始します。すでに病後児保育を利用されている方も、再度登録が必要になります。今まで病児保育を利用されたことがない方も含めて、今後、ご利用を検討いただければと考えています。

次が、4月4日に開所する、松江市障がい者基幹相談支援センター絆の設立についてです。現状を説明しますと、平成23年7月に、障がいのある方をサポートすべく、また、ご家族が迷うことなく相談できる総合相談窓口として、障がい者サポートステーション絆を開設しております。関係機関との情報共有、研修実施など、当時としては非常に先進的な取り組みを行う拠点としてスタートしました。具体的には、総合相談窓口、研修・講座の開催、関係機関との連絡会という機能を持っておりました。近年、障がいのある方の数が増加しており、開設した23年、と比べ、1,300人増え、現在1万3,000人と10%近く増えています。また、支援内容が、例えば介護、障がい、虐待、ひきこもり等、さらに複合化・複雑化しているというケースが出てまいりました。地域生活への移行支援の必要性、虐待や権利侵害の防止など支援の強化が必要となってきています。そこで、今回、障がい者基幹相談支援センター絆という名前で新たに開設をいたします。この機能として、主に4つございます。1つ目が総合的・専門的な相談支援ということで、専門的な資格を持った主任相談支援専門員や社会福祉士、また介護福祉士といったスタッフを配置し、これまでの絆は専門資格のある職員が2名でしたが、新しい絆においては4人、また5年以上の障がい者相談支援の実務経験を持っている者を配置しております。2つ目、相談支援体制の強化として、障がい者福祉の第一線の相談支援事業所からの相談にも対応してまいります。各事業所の諸課題に対して専門的な見地からの助言、必要に応じて指導も行き、ハローワーク、特別支援学校、福祉サービス事業所等々、関係機関との連携も強化してまいります。3つ目、これは役割の拡大ということで、地域移行・定着の推進ということで、施設入所あるいは長期入院の方が地域での生活に移行して安心して生活できるよう、病院あるいは福祉サービス事業所との連携によって、その体制を構築してまいります。4つ目が、権利擁護・虐待防止ということで、そのような懸念がある場合には、その通報窓口となり、また、障がい者虐待防止センター、児童相談所などの専門機関と連携することによって、障がいのある方を守ってまいりたいと考えています。これまでの絆というのは、個々に障がいのある方、あるいはご家族の方からの相談を受けてケースごとに対応していましたが、今回、関係機関との連携をより一層強化していくことを考えております。個々のケースから得られた共通課題への対応などの実務的な面での充実を図っていくとともに、関係機関との連携のさらなる強化、充実ということを進めてまいります。

最後に、市民農園の活用について意見募集を行います。これは、同時に指定管理施設についてのサウンディング調査になります。まず、松江市所有の市民農園は多くの方に利用いただいておりますが、その利用者の満足感を高めるために、ニーズの把握をしたいと考えています。また市民農園は、指定管理で民間の事業者が管理していますが、具体的に農園をどう活用したいかということについて、サウンディング調査という方法で意見を聴取します。先ほどのカラコロ工房についても、このサウンディング調査の形式を経ております。民間事業者との対話により、新たな提案、意見、要望などを把握し、施設情報などをあらかじめ共有することによって、市のプロジェクトにぜひ名をのり上げてみたいとい意欲を持っていただくものです。今回は、市民農園についての、新たな活用の提案の募集、参入しやすい公募要件、新規事業者の参入希望などの調査も兼ねております。例えば、利用に関して、種、苗、肥料を販売して欲しい、季節に合った種や苗を教えてもらえると助かるという意見や要望。施設運営に関して、市民農園の利用促進のために収穫体験などのイベントの実施、作って余

った野菜の子ども食堂への寄附など、これは一つの例ですが、こういった提案をいただきたいと考えております。今回、調査対象となる施設は3つ、八雲ふれあい農園・やくもアグリパーク・東出雲ふれあい農園となります。市民の皆さま、あるいは事業者の皆さまからの意見、提案を募集しております。今回は、いただいたご意見をもとに、市民農園の利活用を図りたいと思っておりますし、皆さまからのご意見を踏まえた形での指定管理の公募スタイルにつなげていきたいと考えております。

私からの説明は以上となります。

(朝日新聞)総合計画についてですが、「2030年の松江のあるべき姿」ということですが、市長は松江への思いを語られながら、知名度・存在感が全国的にはなかなかということもお聞きます。具体的に何を目指しているのかをお願いします。

(上定市長)分かりやすく言えば、今ここに住んでいる松江市民が幸せな生活を穏やかにできているという実感が持てる松江をつくっていくことです。その先に例えば人口であったり、知名度だったりというところにつながっていくと思います。松江で暮らしている人が不安、不満もなく非常に充実した生活が送れているということになり、外の人から、松江に暮らす人は満足感を持って安心・安全に暮らせているなど見れば、視察に行ってみよう、旅行に行ってみよう、いいところだったから移り住んでみようとなると思います。いい人がたくさん集まる場所になれば、いい人材を求めて企業も立地し、産業分野への循環も始まると考えています。そして松江の知名度も上がっていく。松江と聞いたときに何を思い浮かべるかですね、松江に行ったことがない人が、松江についてのイメージが浮かべばいいですけど、今は、正直に言うと、浮かんでいない人のほうが多いのではと思います。自分が生まれ育った地のよさ、離れてみて気づく松江のよさというのは、これ唯一無二の非常に誇れるもの、愛着が持てるものだと思います。それになかなか、私も高校を卒業するまでに気づけなかったというところはあります。それを一言でふるさと教育と言うのはちょっと軽いですが、もっとここに育ててもらったという気持ちで育まれるような、そういう環境があれば、宍道湖で遊んで、ここで生まれ育ててもらったという感覚が芽生えれば、一度この地を離れても、いつか松江で自分の子どもも育てたい、家族一緒に暮らしたい、そして育ててもらった松江に恩返しをしたという気持ちも芽生え、結果的に色々な方が、この地に戻ってくるという循環になると思います。そういう循環をもたらす一つの要素として、松江の知名度、認知度を上げていくのも非常に重要で、松江が誇れる場所であるとまず市民が自分のものとして、周りからも非常に上質、上品なまちだと見られることで我々も自慢したくなるという循環、そして、松江と聞くと、ああ、何かいいところだねと、一回行ってみたいという気持ちが芽生えれば、それこそ観光であったり、産業立地であったり、そういう経済的な潤いというものも出てくると思います、計画の中に盛り込んだつもりです。最後はこの言葉に戻りますが、ここに生まれ育った、子どもたちが、自分のやりたいことがこの松江でできる、夢が実現できると希望を語れる、夢に向き合えるまちでなくてはならないと思います。松江がとてもいいところで、愛着も持ち、そして誇りを持って自慢できる、胸を張れる、松江出身であるということにプライドを持てるまちにしていくのが今後のあるべき松江の姿と捉えています。

(朝日新聞)カラコロ工房について、以前取材をしたとき、収支が取れる案を期待しているという担当課の声もありましたが、今の構想段階では、大きな方針が決まったところで、具体的にはこれから詰めていくということですか。

(上定市長)おっしゃるとおりです。実際は指定管理者として応募いただいた方が、基本構想を土台とし、色々

な創意工夫をこらした提案をいただきたいと考えているところです。

(朝日新聞) 病児保育のキャラクターですが、これはカンガルーですか。

(上定市長) ワラビーです。松江市オリジナルではありませんで、このサービスを提供している、東京の会社のキャラクターになります。中国、四国でこの病児保育のシステムを構築するのは松江市が初めてになります。

(読売新聞) 総合計画について、本日、冊子も頂きましたが、今年度までの第2次総合計画の達成度合いなどは今後、発表されますか。

(上定市長) 今回、洗い替えた総合計画という形ですが、総合計画の審議会のなかで進捗についてご報告をした上で議論していただいており、これまでの計画、戦略における成果をこの計画を立てる過程で整理していただいております。

(読売新聞) 3月31日で第2次総合計画の期間が終了しますが、その結果の報告はありますか。

(上定市長) それは今考えてないです。この総合計画を策定するに当たって、そういった要素を組み込みながら審議会の委員の方に審議していただいております。

(読売新聞) この4月1日で島根町加賀の火災から1年を迎えます。就任前でございましたが、もうすぐ1年ということで、松江市長として被災地をどのように見ておられるかをお伺いします。

(上定市長) 私も市長に就任してからすぐに島根町加賀の被災地を訪れ、そこで実際に被災された方にも話を聞き、その後も、被災された方はもちろん、公民館長、地元の関係者の皆さまとは、断続的に、意見交換の機会を設けております。被災された方の思いに寄り添う形でこれまでも復旧を進めてきたと考えております。それぞれのご家庭の事情もありますので、できるだけ個々に感じてらっしゃる、不安やご希望に沿う形で、市として支援を行いたいと思い、多くの方と話をさせていただきました。その結果として、大火のあった場所は更地になっていますが、そこに道路を整備し、新たな住宅を造るという方向性については、ある程度の線も引けているところです。復興・復旧の道筋というのはある程度見えてきていると考えておりますので、今後も市民の皆さま、実際に被災された皆さまのご希望に沿う形で、できる限り早く、きめの細かい支援をしていきたいと考えております。

(読売新聞) この復旧の道筋が見えてきているというのは、工事の線が描けているからということですか。

(上定市長) そのご家族のかたに具体的に今後の生活についての相談をしており、その道筋が少しずつ見えてきているということもあります。また、災害認定されたことによって、予算の計画などもお示しできるようになってまいりましたので、具体性を持って対応できてきているという認識を持っています。

(読売新聞) スピード感というところの話ですけれども、今、その火災があった現場に行くと、まだどの住宅も建っていない、道路拡幅の工事が始まっていないので当然ですが、これは、市長の中では早いのか遅いのか、それとも妥当なのかというところでいうとどうでしょうか。

(上定市長) 災害の認定が正式にあったのも最近のことですし、具体的にどういう形になるのがよいかというのを膝詰めでお話ししてきた結果として、先ほど申し上げたような地図がつかれるようになった状態ですので、その復興に向けて、早いのか遅いのかというところは被災された方がどう考えていらっしゃるかということだと思いますが、被災者の皆さまが期待されていない形にはしたくないという思いもありますので、腰を据えてしっかり寄り添って、その上で一番いい形での復旧というのを目指していきたいと考えています。

(読売新聞) 明後日から新年度になり、歓迎会やお花見のシーズンになるかと思います。新型コロナウイルスの感染が続くなかで、市長としてはどうお考えですか。

(上定市長) 県の基準ですが2時間4人までというのが続いておる中で、松江市役所も70数名が入庁しますので、歓迎の意は伝えていただきたいと思いますが、通常の年の年度の始めのように歓送迎会というのは開きにくい状況にありますので、感染予防に注意し、県が出しているルールの中で楽しんでいただきたいという気持ちを持っております。ただ、この春、新たに羽ばたいていかれる方を全力で応援したいと考えていますので、できるだけ早くこのコロナの混乱を収束させることが、皆さんに生き生きと働いていただく、あるいは進学した先で生き生きと活躍していただくということになると思いますので、そのための努力は松江市として重ねてまいりたいと考えております。

(NHK) カラコロ工房についてですが、大まかな計画が決まった段階ということですが、今の時点で事業規模が幾らぐらいかという見通しは立っていますか。

(上定市長) 金額的なめどは立っていませんが、今回、いわゆる躯体は残す形ですので、予算としてかなり大きなものがかかることはないと考えています。どういった創意工夫ができるかということを経営者の皆さんに考えていただくことが前提となっております。

(NHK) 上定市長が以前からおっしゃっている職人商店街にもつながる部分があると思いますが、その職人商店街構想の基幹施設のような位置づけにされたいということですか。

(上定市長) できるだけ自由な発想でご提案はいただきたいと思っています。職人商店街のポイントとなる、拠点性のある場所ということではいいですと、出雲かんべの里、インキュベーション施設として、作家の方がどう販路を拡大していくか、どんなものを開発していくかという拠点になっているところがまずあります。そして、既存の商店街、京店などは非常に分かりやすいと思いますが、実際に店舗が並んでいますが、なかなかそれが線にはなっていないという状況ですので、伝統工芸のみならず、現代工芸も含めて、それを線につなげていきたいです。そして、このカラコロ工房があるわけです。カラコロ工房も、先ほど起業・創業などのインキュベーションの拠点ということもあるのではと言いましたが、2階部分は、まさに職人商店街というイメージもあります。以前スティックビルで和菓子教室をやっていたように、多くの人に来ていただき、にぎわいの拠点にもなると思いますので、そこに職人商店街とのリンケージというのは生まれやすい状況ではと考えています。ただ、あくまで自由な発想で、私の期待を超えるような提案が出てくることを期待しています。

(NHK) 病児保育の関係ですが、民間開発のアプリということと、中四国で初めてというお話をしされましたが、この病児保育のオンライン化を自治体独自のシステムなどでやっているところがありますか。

(上定市長) 県内でオンライン化しているところはないですね。

(NHK) では、県内では初めてですか。

(上定市長) そのとおりです。

(中国新聞) 島根町加賀の火災のお話ですが、以前の会見で、消防団の強化に関する意見募集をお知らせいただきました。その強化計画に関しても、最終報告書が出されたということですが、改めて、1年前の火災を受けてこの計画策定に臨まれたのかということと最終報告書を拝見しましたが、問題点を上げているという印象で、具体的にどういう動きをしていくかを今の時点でありましたら教えてください。

(上定市長) 消防団については、消防団充実強化計画というのを策定しました。これは、島根町加賀での火災の反省も踏まえてということになります。この火災で、消防団の方で、もっとこうしたほうがよかったというのが、実際に消し止めるまでの間にあったわけではなく、非常に適切な対応をいただきました。後に振り返ってみると、島根町の消防団の方というのは当然、島根町の地理についても非常に詳しく、場所も動線も分かりますので対応ができていますが、今回は色々なところの消防団が駆けつけてくださり、当然ですが、地理が不案内のところもあり、どう作業分担をするのかという、いわゆる指揮命令系統が必ずしも明確でなかったという反省を聞いております。その中で今回、消防本部に指揮隊というのを設置することにしました。消防団の方が集まったときに、誰をどこに役割分担をし、機動的にどういう形で消火に当たるのかといったところについての全体の取りまとめ機能を指揮隊に置き、消防本部と消防団とをうまくつなげ、できるだけ早く消し止めることができる体制を組んで参ります。加賀の火災を反映させて消防団の充実強化計画とつなげていく一番のところになると考えております。

(中国新聞) 今、市営住宅に避難されている方々ですが、本来であれば昨年5月から1年間の家賃補助という支援だったと思いますが、それを約1年近く延長されたということで、それに関しては、まだ住宅の建設のめどが立ってないということでの延長ということですか。

(上定市長) 実際に長く住んでいただけるような場所を確保していくための道筋にありますので、3月末までしか住めないのではという不安はできるだけ早く払拭したいという思いで、延長しています。延長したからといって、延長期限まではそこには住んでくださいということではなくて、復旧・復興の作業の進捗を見ながら、できるだけ皆さんに安心していただける環境をつくっていかねばならないという思いですので、復旧・復興の道筋もどんどん進めていく必要があると認識しております。

(山陰中央新報) 松江市障がい者基幹相談支援センター絆ですが、新しい機能として、地域移行・定着の推進と権利擁護・虐待防止というところの連携ということで、具体的な取り組みというのは、どんなことをイメージされていますか。

(上定市長) 今回、その連携先として考えているのは、障がい者虐待防止センターや児童相談所などということになります。今までは、実際虐待などを受けられたときの相談窓口の機能を、この絆には置いていませんでした。何かあったときに通報してもらい、そこで相談に乗り、具体的なその後の支援につなげていく、そしてまた、専門的な知見を連携先はお持ちですので、どういった形で助言していくのがいいのかといったところについても、具体的にサポートができるようになります。

(山陰中央新報) 従来は障がい者というところにまず焦点を当てていたのを、裾野を広げ色々な相談を受け付けるということですか。

(上定市長) 従来は、障がいのある方のための相談窓口という中で、特に権利擁護や虐待の防止という観点に特化して何か連携先を持って少し専門的なアドバイスができていたわけではありませんでした。連携先との関係を深めることによって、速やかに対応できる体制を整えたということになります。

(山陰中央新報) 市民農園の活用に関する意見募集というところで、市民農園は趣味の中の取り組みかと思っておりましたが、ここに着目されたのは何か意向がありますか。

(上定市長) 利用者が非常に増えておりまして、特に最近、コロナということで、屋外で楽しめるということもあ

りますし、農作業を趣味にすることによって健康寿命も延びるという科学的なデータもあると思います。農園に対するニーズというのが強まっている、増えているという状況が見受けられます。せっかく市民農園を持っていますので、ニーズに応じてどんな工夫ができるのかなということ、市としても考えていますが、市民の皆さまや、指定管理をお願いする方の具体的な創意工夫を聞いてみてはということで、今回、サウンディング調査という手法を取っています。今回、実験的にやってみますが、指定管理の公募がしやすくなり、事業者の方が参加しやすくなるよう、色々な部門で今回のような形で意見を伺い、できるだけプラン自体の具体性を持って考えていけるような仕組みを整えていきたいと考えています。

(山陰中央新報) コロナに関して、部活の停止も3月末で終わり、一方で、松江市ではコロナの感染者数が多いですが、今後、松江市として独自の取り組みや、市長からの呼びかけなどはありますか。

(上定市長) 基本にあるのは、もちろん感染の拡大防止です。加えて、社会経済活動をできるだけ通常どおり営んでいくための工夫といえますか、その両立が必要だと考えています。春休みが3月25日から本格的に始まり、その後の動向を見ているところではありますが、特に県外に移動、県外からの移動による感染が増えており、また家庭内での感染、特に若年層での感染が多い状況が続いています。今後、当然ですが、基本的な感染対策の呼びかけの継続、今も市民の皆さまには、耳障りかもしれませんが、感染予防対策の徹底ということを、私から直接アナウンスしたり、定期的なチラシの発行、会見などで感染状況について分かりやすくお伝えしてまいります。